

卵画と洞窟画における印象分析に関する研究

—自己印象評定および自己イメージとの関連から—

目白大学人間学部

目白大学心理カウンセリングセンター

目白大学人間学部

目白大学人間学部

田中勝博

土田恭史

今野裕之

丹 明彦

【要 約】

本研究は、卵画と洞窟画における描画内容および対象者の自己印象評定と自己イメージとの関連について検討した。その結果、自己イメージの違いによって、卵画や洞窟画に投影される描画アイテムが異なることが示唆された。自己イメージ高群は明るく、構成的な描画を行うのに対して、低群は暗く非構成的な描画を行うことが多い傾向が認められた。描画に対する印象評価は、描出された描画の全体的な印象や構成度などによって影響を受けるが、自己イメージも描画の印象評定に影響をおよぼすことがうかがわれた。

キーワード：卵画，洞窟画，印象分析，自己イメージ，投影描画法，描画のコード化

I 問題と目的

絵画療法における描画表現を促進する技法として、田中（1995）は線画刺激の楕円枠を治療的コミュニケーションに利用した卵画と洞窟画の二つの描画法を考案し、臨床に応用してきた。また、田中ら（2003）は卵画と洞窟画の描画内容を分析するために、両技法で表現された描画内容について一定の判定基準作成のための描画表現のコード化を試みた。本報告では、描画表現のコード化を利用して、卵画と洞窟画の印象分析における自己評価や自己イメージと描画反応との関連について検討し、自己イメージが描画内容にどのように反映するのか、また、自己イメージの違いによって自分の描いた作品への印象評価がどのように影響するのかについて検討したい。

投影描画法は、現在、数多くのさまざまな技法が考案されており、画用紙と鉛筆などの簡単

な用具で行える実施の容易さや導入のしやすさ、実施への抵抗の少なさ、反復実施の可能性などの特徴をもっているため、現在でも心理臨床の多くの現場で活用されている。しかし、投影描画法についての客観的評価や解釈基準に対して、その信頼性や妥当性についての批判があるために、臨床現場では数多く用いられながら、投影描画法に関する心理学的研究が少ないという実態がある。青木（1979, 1980）は、この投影描画法に対する批判に対して文献研究や実証研究によって、投影描画法が臨床的に有効な方法であることを論証し、特に、全体的印象に基づいた描画表現の評価が重要であることを指摘している。高橋ら（1986；1991）や馬場（2005）らも、全体的印象に基づいた評価の印象分析について、描画解釈におけるその重要性を指摘している。馬場（2005）は、全体的印象にはクライアントの豊富な情報が含まれている

可能性を示唆するとともに、客観性の追求によって描画の全体性の把握ができなければ描画表現の重要な特徴を損なうことになりかねない、と指摘している。

本研究では、まず、卵画と洞窟画のコード化を見直し再定義し、自己イメージが描画表現にどのように影響しているかについて、自己印象評定による印象分析との関連をみることを目的とする。

II 方法

1 卵画・洞窟画のコード化

以下の手順で描画内容のコーディングを行った。

- (1) 田中ら(2003)の描画内容コードを参考にし、これまでの卵画・洞窟画に関する臨床経験、および今回の描画結果を一覧した様子をもとに、専門家2名と大学院生4名との話し合いを行い、コード化される反応数が極端に少なかった項目や、専門家の臨床経験から、分析にあたって適切でないと判断された項目を削除・変更した。
- (2) その結果、卵画の最終的なコードは8カテゴリー(人間・動物・植物・自然・物体・言語記号・付加・マンガ表現)36アイテムとなった。洞窟画は、17カテゴリー64アイテムとなった(詳細なコード表は最後に付録として掲載してある)。
- (3) 描画内容のコード化の他に、卵画では、分割型(卵の割れ方)、分離型(割れた殻と描画反応の位置関係)、萎縮の有無、殻の有無、殻の模様の有無についてもコード化した。洞窟画では、大分類として、風景反応と非風景反応にわけ、11の風景型をコード化した。また、卵画・洞窟画ともに、描線強弱、反応数(描画内容の個数)、陰影反応、形態水準についてコード化を行い評定した。

2 印象評定尺度・自己イメージ尺度の作成

(1) 印象評定尺度

鈴木・岸(2006)、高橋(1993)、一谷ら(1975)による樹木画の印象評定、今村(2004)のコラージュ印象評定、新井(2005)による

HTP印象評定、田中(2007)による誘発線法印象評定などより、重複するものを除き、描画後の描画反応に対する対象者自身による印象評定(以下、自己印象評定を呼称する)にふさわしい項目を抽出した。

抽出した項目を参考に、専門家2名と絵画療法を学んでいる大学院生4名との話し合いにより項目を構成した。構成するにあたっては、①先行研究を参考に予測される因子を考慮し、項目に偏りのないこと、②表現をわかりやすく、現在に相応しい文言にすること、③評定しにくい項目は採用しないこと、④バランス・評定者の負担を考えた順番にすること、などが特に留意された。結果として、18項目5件法の尺度が構成された。過去の文献を参考に1因子の尺度として構成され、尺度得点が高くなるほど、描画に対して明るく、ポジティブな印象評定をしたことを意味する(詳細な項目は最後に付録として掲載してある)。

(2) 自己イメージ尺度

長島ら(1966a)のSelf-Differentialおよび長島ら(1966b)のSelf-Differential大学用、田中ら(1992)の尺度を参考に、重複するものを除いて項目を抽出した。抽出した項目を参考に、専門家2名と大学院生4名との話し合いを行い、現在あまり使われていない表現や被験者に適切でないと判断される表現などを変更した。結果として、30項目5件法の尺度が構成された。外交的で自己肯定的なイメージを持つ場合、本尺度得点が高くなる(詳細な項目は最後に付録として掲載してある)。

3 調査

被検対象：都内のA大学の大学生・大学院生
246名(男50名、女196名)

平均年齢 = 20.43 (SD = 4.382)

調査時期：2007年6月から7月

実施方法

- (1) 集団法により、2人をペアで組ませた上で、①卵画、②洞窟画の順に、田中(1995)の教示方法に基づいて楕円枠をペアに描かせ、それを相互に交換をさせて、描画を行うよう教示した。両技法とも彩色して完成

させた後、物語作りも実施した。

- (2) 描画調査を実施したのち、描画者に教示を行い、①自己印象評定尺度、②自己イメージ尺度の記入を求めた。

倫理的配慮

回答を拒否する権利があること、結果は統計的に処理し研究以外には使用しないこと、希望者には結果のフィードバックをすることなどを事前に教示し、描画を論文に掲載してよいかの確認も取った。また、結果の管理に十分注意を払うことも伝えた。

Ⅲ 結果

1 卵画の主反応

卵画の主反応の出現頻度はFig. 1に示されたように、動物反応が一番多く出現しており、生命（人間反応、動物反応、植物反応）と非生命（自然反応、物体反応、言語記号反応）の大分類でみると7割が生命反応であった。この結果は今まで行ってきた基礎研究とほぼ同様の結果が得られた。

2 洞窟画の構成反応

洞窟画の大分類である風景反応と非風景反応の割合をみると、圧倒的に風景反応が多かった（99%）。

洞窟画のアイテムの詳細な結果については、後述する。

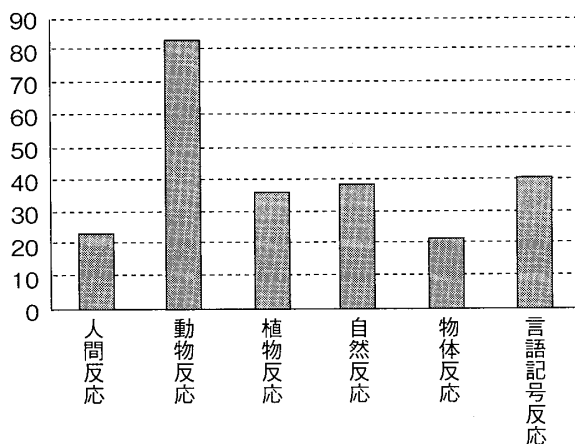


Fig. 1 卵画の主反応カテゴリの出現数

3 各評定尺度の因子分析結果

次に、各評定尺度について因子分析を行い、尺度の信頼性妥当性について検討した。

まず、自己印象評定尺度について、主成分分析プロマックス回転による検証的因子分析を行った。分析にあたっては、卵画及び洞窟画の自己印象評定尺度各18項目（項目は同じもの）のデータを合成し、492名のデータとして分析を行った。その結果、構成概念妥当性、および解釈可能性の観点から、「自己印象評定」1因子からなる尺度であることが確認された。Table 1はその結果をまとめたものである。本尺度は1因子性の描画の印象評定尺度として構成されたものであり、本結果はそれを支持するものであったといえる。この尺度の得点が高いほど、描画に対して対象者がポジティブな印象を受けていることを意味する。また、信頼性係数（ α ）は.930と非常に高く、信頼性のある尺度であると考えられた。

次に、自己イメージ尺度について主因子法プロマックス回転による、探索的な因子分析を行った。その結果、3因子25項目が抽出された。まず第1因子は「活発な—おとなしい」、「明るい—くらい」といった活動的な自己イメージの因子と考えられたため、「活動性」とした。次に第2因子は「大人っぽい—子どもっぽい」、「理性的な—感情的な」といった理性的でまじめ、責任感のある理知的な自己イメージに関する項目と考えられ、「理知性」と命名した。最後に第3因子は「のんびりした—せっかちな」、「あたたかい—つめたい」、「やさしい—きびしい」といった穏やかでやさしい、包容力のある自己イメージと考えられたため、「包容性」と命名した。各因子の間にはいずれも中程度の有意な正の相関が見られた。

4 印象評定間および自己イメージとの相関関係

描画に対する印象評定間の相関関係を分析した。まず自己印象評定については洞窟と卵画の評価に有意な中程度の正の相関が見られた（ $r = .426^{**}$ ）。また、描画のイメージと自己イメージの間にも弱い正の相関が見られた。卵画の自己印象評定は自己イメージにおける「活動

Table 1 自己印象評定尺度因子分析結果

	自己印象評定	共通性
好きな-嫌いな	.827	.631
明るい-暗い	.794	.544
あたたかい-つめたい	.792	.494
安定した-不安定な	.765	.466
おもしろい-つまらない	.753	.488
大きい-小さい	.738	.395
にぎやかな-さびしい	.728	.388
強い-弱い	.703	.585
ノーマルな-アブノーマルな	.699	.332
はっきりした-あいまいな	.698	.685
やわらかい-かたい	.683	.530
ていねいな-おおざっぱな	.650	.628
動的な-静的な	.629	.488
深い-浅い	.623	.422
個性的-ありふれた	.576	.568
理性的な-感情的な	.542	.293
現実的な-空想的な	.468	.205
大人っぽい-子供っぽい	.453	.219
信頼性係数 (α)	.930	
寄与率	46.450	

性」($r = .256^{**}$), 「包容性」($r = .282^{**}$) と正の相関, 洞窟画の自己評定は「活動性」($r = .134^*$) と優位な弱い正の相関が見られた (Table 3)。自己イメージの各因子には正の相関関係が認められるものの, 活動的な明るい自己イメージは描画評価の肯定的な評定に共通して関連していたことから, 描画の評価には自己イメージのなかでも活動的なイメージが関与していることが伺われた。

5 形態水準

今回は, 洞窟画についてしか検討できなかったが, 形態水準を要因とした3水準の一元配置分散分析の結果, 描画の形態水準が悪い場合, 描画に対する自己印象評定は有意に低い (洞窟画 $F(2,228) = 7.359$ $p < .01$)。洞窟画の形態水準が低い人は卵画においても同様に悪いと考え, 洞窟画の形態水準の良し悪しを要因とした一元配置分散分析を行った結果, 卵画においても形

態水準の有意な主効果が見られた ($F(2,194) = 3.943$ $p < .05$)。描画の形態水準の良し悪しは描画の印象評定に強い関連を持つと考えられる。しかし, これと自己イメージには関連は見られなかった。

6 描画反応と自己印象評定および自己イメージ

次に, 描画に対する自己印象評定および自己イメージ評定尺度の平均値を基準に, 対象者をそれぞれ尺度ごとに高群・低群に分類し, 自己印象評定および自己イメージと各描画様式・アイテムの出現数とのクロス集計を行い, χ^2 検定によって比較した (なお有意水準は, $p < .01 : **$, $p < .05 : *$, $p < .10 : \dagger$, と表記した)。なお本稿では, 臨床的な観点から, 対象者の総合的で肯定的な自己イメージの程度の違いを重視し, 自己イメージ評定得点の高かった, 自己に対して肯定的なイメージの高い群を自己イメージ高群,

Table 2 自己イメージ尺度因子分析結果

	活動性	理知性	包容性
活発な-おとなしい	.852		
明るい-暗い	.829		
外向的な-内向的な	.790		
おしゃべりな-無口な	.755		
積極的な-消極的な	.718		
派手な-地味な	.692		
意欲的な-無気力な	.497		
ポジティブな-ネガティブな	.411		
個性的な-ありふれた	.404		
大人っぽい-子どもっぽい		.793	
注意深い-そそっかしい		.636	
きちんとした-だらしない		.607	
理性的な-感情的な		.606	
現実的な-空想的な		.583	
責任感ある-無責任な		.566	
まじめな-不まじめな		.550	
複雑な-単純な		.460	
のんびりした-せっかちな			.764
おだやかな-激しい			.751
やさしい-きびしい			.683
やわらかい-かたい			.614
あたたかい-つめたい			.599
おおらかな-こまかい			.565
安定した-不安定な			.450
親切的な-意地悪な			.419
寄与率	31.873	9.3877	6.8806
累積寄与率			48.141
信頼性係数(α)	.895	.822	.857
因子間相関			
活動性			
理知性	.466		
包容性	.492	.467	

主因子法プロマックス回転 図中の**は $p<.01$ *は $p<.05$ をあらわす (以下同様)

Table 3 各描画の自己評定と自己イメージの相関

	自己印象評定 (卵画)	自己印象評定 (洞窟画)	活動性	理知性	包容性
自己印象評定 (卵画)					
自己印象評定 (洞窟画)	.426**				
活動性	.256**	.134*			
理知性	.099	.001	.466		
包容性	.282**	.096	.492	.467**	

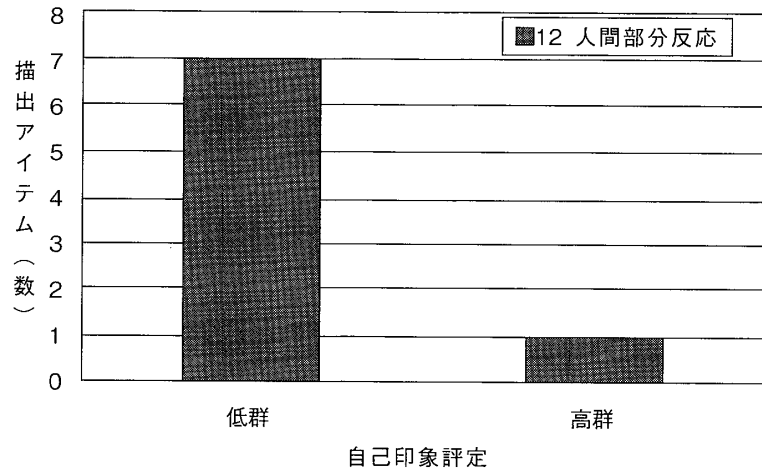


Fig.2 卵画の自己印象評定と表出アイテム

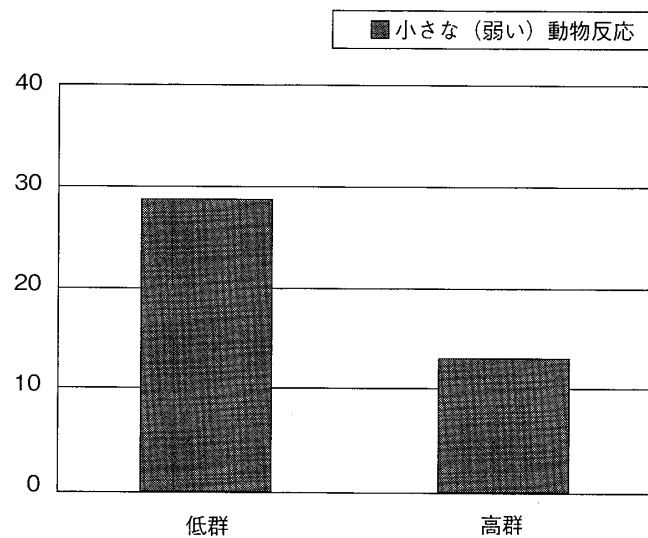


Fig.3 自己イメージの違いと描出アイテム (卵画)

自己イメージ評定得点の低かった自己に対する肯定的なイメージの低い群を自己イメージ低群とした。そして、これと描画様式および描画アイテムとの関連性について検討した。

(1) 卵画の分析結果

卵画では、Fig. 2に示したように、人間部分反応の見られる描画は低い印象評価が行われることが多かったが、自己イメージとは有意な関連はなかった。Fig. 3に示したように、自己イメージ低群は卵画において小動物反応を有意に多く描いていた ($\chi^2 = 8.409$ $df = 2$)。また、自己イメージが高い群は強いタッチで描画をし、自己イメージが低い群は弱いタッチで描画をす

ることが多く ($\chi^2 = 6.190^*$ $df = 1$)、自己イメージが低い群ほど描画に陰影をつける数が多かった ($\chi^2 = 7.156^{**}$ $df = 1$)。ただし、陰影は必ずしもネガティブな描画としては評価されてはいなかった。また、自己イメージ低群は卵画の殻を完全に分離するケースが多かったのに対して、自己イメージ高群は卵の殻を残す残留型の描出をするケースが多かった ($\chi^2 = 8.963^*$ $df = 1$)。

(2) 洞窟画の分析結果

洞窟画において自己印象評定が高い群では、有意に多く山が描かれていた (一つ山： $\chi^2 = 5.105^{**}$ $df = 1$, 3つ以上の山： $\chi^2 = 4.850^{**}$

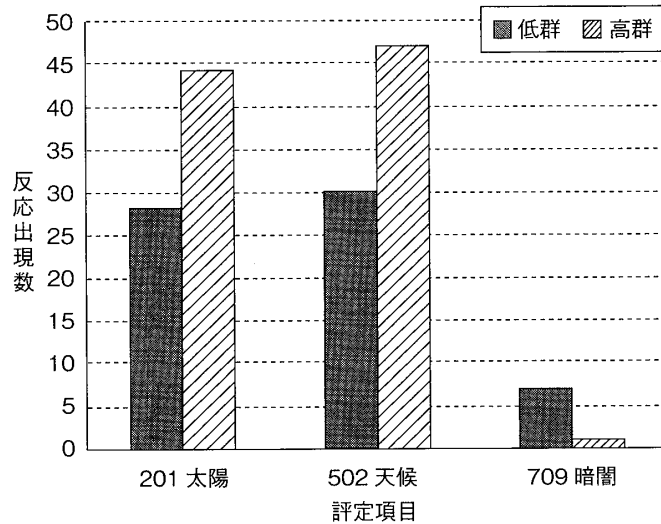


Fig.4 自己印象評定と描出アイテム (洞窟画)

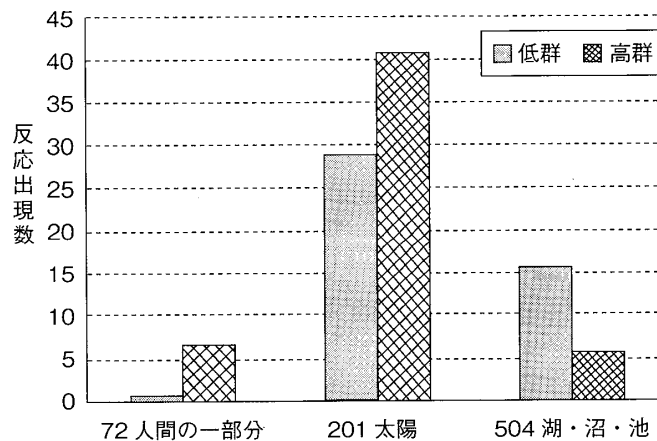


Fig.5 自己イメージによる描画アイテムの違い (洞窟画)

df = 1)。同様に複数の家の描出も有意に多く見られた ($\chi^2 = 4.665^{**}$ df = 1)。ただし、自己イメージと形態水準の間には有意な関連性は見られなかった。

洞窟画の描画アイテムの出現との関連では、鳥が印象評定高群では多く描出されていた ($\chi^2 = 3.610^*$ df = 1 片側確率 Fig. 4)。また、太陽の描出も自己評価高群に有意に多かった ($\chi^2 = 5.044^*$ df = 1)。逆に、統計的に有意ではないが、月は印象評定低群に多い傾向があった ($\chi^2 = 2.993^\dagger$ df = 1 片側)。さらに、自己評価低群は暗闇を洞窟画に有意に多く描いており ($\chi^2 = 4.653^*$ df = 1)、暗い夜のイメージの描画が自己評価低群では描出されやすい傾向が認

められた。自己評価高群では天気の描出も有意に多かった ($\chi^2 = 5.484^{**}$ df = 1)。

自己イメージによる比較では、洞窟画において自己イメージ高群に人間部分反応の描出が有意に多くみられた ($\chi^2 = 4.974^*$ df = 1 Fig. 5)。また、太陽が自己イメージ高群においても有意に多く描かれていた ($\chi^2 = 3.815^*$ df = 1)。自己イメージ低群では湖や沼などの水源の描出が有意に多かった ($\chi^2 = 4.472^*$ df = 1)。

Ⅲ 考察

卵画と洞窟画で用いる描線刺激の楕円形は広義には閉じた空間としての円である。円の大きな特徴は、丸みを持った形態によって空間を閉

じることにより、内なるものと外側との間に「隔て」や「境界」を設け、内なるものを再び浮かび上がらせることである。卵画と洞窟画は、楕円枠刺激に加えて、教示段階における治療者の言語的関与によって、その楕円枠が象徴性豊かな「卵」という具体的かつ立体的なイメージや「洞窟の入り口」という立体的空間イメージへと意味的に変容し、被験者に自分の内（ウチ）と外（ソト）を分ける手がかりを与えるところに特徴がある。両技法のそれらの描線刺激関与や言語的関与の方法によって、田中ら（2003）の結果と同様に今回の結果においても、卵画の描画反応には生命反応が多く、洞窟画では風景反応が多いという結果が得られた。

本研究では、描画反応のコード化をさらに検討したうえで、被験者の自己イメージや自己印象評定による印象分析と両技法における描画反応との関連をみた。次に、それらの考察を述べたい。

描画に対する印象評定は、洞窟と卵画の評価に有意な相関が見られ、卵画に対する描画評価が肯定的な対象者は洞窟画においても同様の評価をしやすいたことが認められた。特に描画における構成の度合い、形態水準といった様式的な要素は描画の印象評価を左右する要因であることがうかがわれた。描画の形態水準が悪い場合、描画に対する自己印象評定は有意に低い傾向が認められ、形態水準のよしあしは描画の印象評定に強い関連を持つと考えられる。

卵画の結果から、人間部分反応の見られる描画は低い印象評価が多く、自己イメージ低群は卵画において小動物反応を多く描いていた。また、自己イメージが高い群は強いタッチで描画をし、自己イメージが低い群は弱いタッチで描画をすることが多く、また描画に陰影をつける傾向があった。

洞窟画では、自己印象評定が高い群では山や複数の家の描出が多い傾向にあった。このことは、山や家を含んだ描出は、風景描写としての構図が安定し描画の印象がより構成的になるため、印象評定において、構成的で形態水準が良く好印象と判断されやすい傾向があるのではないかと考えられる。つまり、描出された描画の全体的な印象や構成度などによって、自己評価

がある程度の影響を受けると考えられる。自己評価高群では天気や家の描出も有意に多く、山や家、天気などイメージ豊かで構成的に描出された絵を描く傾向が認められる。

その他の描画アイテムとの関連では、自己印象評定高群では鳥や太陽など明るく動的なものも多く描出されていたが、対照的に、統計的に有意ではないものの、自己印象評定低群では月などの静的なアイテムを描出したり、暗闇を洞窟画に有意に多く描くなど、暗い夜のイメージの描画が多く出現する傾向が認められた。これは自己イメージのちがいで、卵画や洞窟画において出現しやすい描画アイテムが異なることを示唆している。自己イメージが高いものは、太陽のように明るく、また構成的な描画を行うのに対して、自己イメージが低いものは弱々しく暗い、非構成的な描画を行うことが多いようだ。このことは、描画表現の中に、自己イメージが投影されるためであろうと考えられる。

また、描画に対する自己投影は必ずしも描画内容だけにはとどまらない。本研究の結果、描画の自己印象評価は自己イメージと弱い正の相関が見られたことから、描画内容や様式面だけでなく、描画に対する自己評価にも自己イメージが投影されるといえるのではないだろうか。特に自己イメージのなかでも活動性についてのイメージの違いが関連していることがうかがわれた。

絵画療法では、馬場（2005）が指摘するように、クライアントの描画にはクライアントの豊かなパーソナリティ情報が含まれており、それを治療者がどのように受けとり、その印象をクライアントにどのように返していくかということが重要である。描画そのものだけでなく、クライアントの描いた描画に対する評価もまた、臨床的に大きな意味を持つことが改めて示唆されたといえる。今回は、被験者の自己印象評定による印象分析と描画反応との関連をみたが、今後、他者評定と描画との関連や自己印象評定と他者評定との関連を調べることも重要だと思われる。

描画の全体的印象を捉える代表的な方法の1つに印象分析があるが、中井が、「治療関係の中

で書かれた絵は、従来病者の絵画として紹介されてきた絵とまったく違ったもの」であると指摘しているように、臨床で用いられる投影描画法を集団法で実施して、印象分析を行うことには限界があることを理解しておく必要がある。卵画と洞窟画の集団法による基礎的資料がある程度まとまったら、今後は個別法による調査や臨床データの印象分析を行っていくことが必要であろう。

また、自己イメージ低群において、湖や沼などの水源の描出が多かったことなどをどう理解するかであるが、印象分析と描画コードとの関連による分析だけでは限界があると考えられる。投影描画法における分析においても、形式分析から内容分析、そして時系列分析が必要だと言われているが、内容分析、系列分析も含めた分析方法を考案していく必要があると考えられる。

今後の課題として、印象分析の項目内容をより吟味し、尺度としても信頼性、妥当性について引き続き検討し、精度を高めていくことことがまずあげられる。また、本研究では対象者の全体的な自己イメージを重視したため、下位因子については検討しなかったが、今後、個々の

因子と描画の自己評価、描画内容との関連についても検討していきたい。加えて、全体的印象評価を描画反応だけではなく、個別の面接状況の評価項目の作成など描画反応の全体的評価ができるようなアセスメントシステムを作っていくことが望まれる。特に、高橋（2007）が「描画テストの実施と、そのフィードバックそのものが治療としての意義をもつ」と指摘しているように、描画表現のクライアントへのフィードバック方法や共有方法についての研究が今後重要であると考えられる。

付記：本研究は目白大学特別研究費の助成を受けて行われた。

謝 辞

本研究について、忙しいなか印象分析の項目作成やデータ整理を協力してくれた大学院臨床心理学専攻修士課程の濱名円佳さん、古川理恵さん、鈴木澄香さん、瀬戸口智裕くん、加邊美和子さん、黒沢由美さん、新楽勇太郎くん、前田佳代さん、水越順子さんらに心より感謝したい。

Appendix

卵画コード表

I 形式分析と印象評価

1 分割方法

垂直水平分割 = 1

一点集中分割 = 2

不完全分割 = 3

その他 = 4

2 分離型

完全分離型 = 1

残留型 = 2

部分露出型 = 3

その他 = 4

3 萎縮の有無

有 = 1, 無 = 0

4 殻の有無

有 = 1, 無 = 0

5 殻の模様の有無

有 = 1, 無 = 0

6 描線の強弱

強 = 3, 普通 = 2, 弱 = 1

7 反応数

8 陰影反応

有 = 1, 無 = 0

9 形態水準 (印象評価)

良 = 3, 普通 = 2, 悪 = 1

II 投影内容: 主反応 (内容分析)

1 大分類

A 生命反応 B 非生命反応 C その他の反応

2 小分類

A 生命反応

10 人間反応

11 人間全体反応

12 人間部分反応

13 非現実的人間反応 (天使, 悪魔, ロボットなど)

20 動物反応

21 鳥反応

22 怪獣・怪物反応

23 大きな (強い) 動物反応

24 小さな (弱い) 動物反応

25 動物部分反応

26 その他 (虫, ゲジゲジなど)

30 植物反応

31 花反応

32 樹木反応

33 植物反応

34 芽生え反応

B 非生命反応

40 自然反応

41 風景反応 (山, 川, 海, 道など)

42 岩石反応

43 天体反応 (太陽, 月, 地球, 星など)

44 天候反応 (虹, 雷, 雨など)

45 その他

50 物体反応

51 建物反応 (家, ビルなど)

52 食物反応 (りんご, 葡萄など)

53 お金・宝反応

54 武器・凶器反応

55 汚物反応 (大便, ゴミなど)

56 その他

C その他の反応

60 言語記号反応

61 言葉反応

62 記号反応

63 その他 (光, 雷, 爆発, 液体など)

III 投影内容の副反応

70 付加反応

71 キマイラ反応

(翼, 首の付加物による合成)

72 道具反応 (手に道具など)

73 武器反応 (手に武器など)

74 メッセージ反応

(手紙や看板などを持つ)

75 その他

80 マンガ表現反応

81 表情表現マンガ符

82 吹き出しセリフ効果音

83 動的描線

洞窟画コード表

反応数

構成：構成されている = 1 非構成 = 0

横縦（楕円の方向）：横 = 1 縦 = 0

描線強弱：強 = 3 中 = 2 弱 = 1

形態水準：優 = 3 良 = 2 可 = 1

余白の利用：立体構成的使用 = 3

人物・物体 = 2

落書き・説明文 = 1

反応無し = 0

風景型

田園・郊外型 = 1 都市・市外型 = 2

海浜・海岸型 = 3 森林・草原・山岳型 = 4

宇宙型 = 5 幻想・心象風景型 = 6

人間・動物型 = 7 物体反応型 = 8

記号・図形型 = 9 閉鎖洞窟・暗闇型 = 10

その他 = 11

大分類

A：風景反応，B：非風景反応

A. 風景反応

風景構成基本反応

10 山反応（丸山+，とんがり-）

11 一つ山

12 二つ山

13 それ以上

14 火山

20 川反応

30 田反応

40 道反応

50 家屋反応

51 一軒家

52 複数の家が描かれている

53 ビル

54 廃墟

55 その他

60 樹木反応

61 描かれている木は一本のみ

62 二本の木

63 それ以上

64 果実が実っている

65 葉っぱが描かれている

70 人反応

71 人間の全身（+，棒人間-）

72 人間の一部分のみ（頭・足だけ描くなど）

73 非現実的人間（天使・悪魔など）

80 動物反応

81 大動物全体（ゾウ，ライオン，恐竜）

82 小動物全体（カメ，ペットなど）

83 鳥

84 動物の一部分のみ（ウサギの耳・しっぽなど）

85 その他

90 花反応

100 石反応

200 太陽・月反応

201 太陽

202 月

300 分割線反応（水平線・地平線など）

画面を分割するようにひかれた用紙にほぼ水平となる一本の線。

400 海反応

401 海

402 海岸線（砂浜・波打ち際など）

403 島

500 自然反応

501 宇宙（地球や宇宙・惑星など）

502 天候（雨・雲・虹・雷など）

503 植物（樹木と花以外の草など）

504 湖・沼・池

505 滝

506 洞窟

507 その他

600 物体反応

601 物（食器・道具など）

602 食物

603 お金・お宝

604 建造物（家屋以外の橋・門・扉など）

605 階段

606 武器

607 乗り物

608 汚物

609 装飾品・装身具（衣類・靴など）

610 その他

700 その他

701 記号

702 言語
703 陰影
704 火炎
705 爆発
706 血液
707 性
708 光

709 暗闇
710 室内
711 風呂
712 音楽（楽器や音符）
713 その他
800 マンガ表現反応

【引用文献】

青木健次（1979）. 投影描画法研究の動向. 京都大学教育学部紀要, 25, 209-222
 青木健次（1980）. 描画法における全体的印象について. 京都大学教育学部紀要, 26, 129-140
 馬場史津（2005）. 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
 今村友木子（2004）. 印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析 心理臨床学研究, 22 (3), 217-227
 中井久夫（2004）. 徴候・記憶・外傷 みすず書房
 神宮英夫（1996）. 印象測定のパシカ学 川島書店
 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道（1966）. 自我と適応の關係についての研究（1）—Self-Differential作製の試み— 東京教育大学教育学部紀要 12, 85-106
 高橋雅春・高橋依子（1986）. 樹木画テスト 文教書院

高橋雅春・高橋依子（1991）. 人物画テスト 文教書院
 高橋依子（2007）. 描画法テストのPDIによるパーソナリティの理解 臨床描画研究, 22, 85-98.
 田中勝博・原野広太郎（1992）. 思春期の登校拒否児および健常児群における自己概念に関する研究. 教育相談研究 Vol.30, 8-15
 田中勝博（1995）. 卵画と洞窟画—臨床描画における楕円枠空間の研究—（第1報）. 臨床描画研究 X : 151-168
 田中勝博・今野祐之・小佐野綾（2003）. 卵画と洞窟画の基礎研究（1）—楕円枠線画刺激による描画促進に関する研究— 目白大学人間社会学部紀要, 3, 77-96
 田中勝博・今野裕之（2007）. 誘発線法の反応特徴に関する研究 —MMPI, SDS, 印象評価との関連を通して— 目白大学心理学研究紀要, 3, 27-39

Image Assessment of Egg Drawing Technique and Cave Drawing Technique

— Relationships between the contents of drawings , the self-evaluation of the
impression for drawings and self-images —

Masahiro Tanaka Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Takashi Tsuchida Mejiro University, Psychological Counseling Center
Hiroyuki Konno Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Akihiko Tan Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2008 vol.4

【Abstract】

Egg-Cave drawing technique is one of the methods for art therapy. It is thought that drawings in this technique offers profitable information for understanding of personality and pathology. The purpose of this study was to examine the relationship between the contents of these drawings , the self-evaluation of the impression for drawings and self- concept. As a result, it was suggested that the style and contents of drawing are influenced by the difference of the self-images. The higher self-images group drew a bright, structural pictures, in contrast, the lower self-images group drew a dark, non-structural ones. It was seen, moreover, the self evaluation of the impression of drawings was influenced by self-images.

keywords : egg drawing technique, cave drawing technique, image assessment, self-images, projective drawings, drawings encoding